

人為の歴史をとおしてみた県北のカシワ林の 消長とシジミチョウ

原 聖 樹

Historical vicissitude of the *Quercus dentata* forest and the family
Lycaenidae affected by the human being

Seiki HARA

はじめに

神奈川県北西部、いわゆる県北地域のチョウ相が相模川（桂川）上流域の関東山地（小仏山地）や道志山塊のそれを反映しているのは、地理的にいって当然のことである。わけでも、関東山地の影響が大きい。その特色がおよぶエリアの末端域として県北のチョウ相をとらえることができる。

ここでは、津久井郡藤野町・相模湖町の北半をばくぜんと「県北」と呼んで話をすすめることにしたい。キマダラルリツバメ・ウスイロオナガシジミ・オナガシジミ・ウラクロンシジミ・ムモンアカシジミ等、本県では県北の特産種ともいふべきチョウがたまたまそろって樹林性のシジミチョウである点はおもしろいが、関東山地におけるこれらの種の分布限界域がこの県北に当る、といってもよいだろう。キマダラルリツバメはそのうちでも分布圏の狭少な種である。

といっても、神奈川サイドでみた場合、他の地域では稀少なハヤシミドリシジミ・オオミスジ・ホシミスジ・ヘリグロチャバネセセリ・アサマシジミ等が当地に比較的多い点は、県北の特色の一つといってもよいかもしれない。また、この地域の周縁にはカンアオイ類とそれを食餌とするギフチョウの分布限界線がえがかれる。

なお、本県では津久井にしか記録のないカミキリとして高桑（1980）は、コボトケヒゲナガコバネカミキリ・ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ・クリチビカミキリの3種を掲げている。

さて、県北にはカシワ林が数多く見られ、そこはハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミの恰好な生息地になっている。後述するように、この地のカシワ

林は特殊な人工林である。では、人間の生産活動の歴史はカシワへの干渉をとおして、そこに棲むチョウたちにどのような作用を与えてきたのだろうか……？

本県唯一のカシワ林

カシワ林は、神奈川県北西部の相模川流域において標高160～850mの地に残存している。行政的には、藤野町の北半に多く、分布圏の延長は相模湖町・八王子市・山梨県北都留郡上野原町の一部におよぶ。都県界尾根からその南側斜面へかけて、相模川の左岸（小仏山地）にカシワの分布が集中しており、右岸山地（道志山塊）の一部にもある。そして、これらのカシワ林にはほとんど例外なくハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミが発生しているとみてよい。

ハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミは樹林性のシジミチョウで、そのライフ・サイクルは食餌植物であるカシワのそれとマッチしている。夏期、前者はカシワの主として休眠芽付近・1～2年枝上に1回で1～3卵、また後者は太枝や樹皮上に1～10卵を産む。両種とも、卵で越冬して翌春カシワの芽吹きと同時に孵化する。幼虫は若葉を食べて成長し、葉が硬化する時分には蛹となって、6月中旬には成虫が羽化してくる。年1化。発生期は6月半ばから8月上旬におよぶ（両種とも、発生期はほぼ同じであるが、産卵部位がややことなる）。

カシワ林の植生は、宮脇ら（1972）のいう「クスギーコナラ群集」（ヤブツバキクラス域の代償植生）に該当する。「シラカン群集・ケヤキ亜群集」と見なされた場所にもカシワは生えているが、その例はきわめてわずかである。林を構成するほどまとまった数のカシワは、現在の神奈川県ではここでしか見ることができ

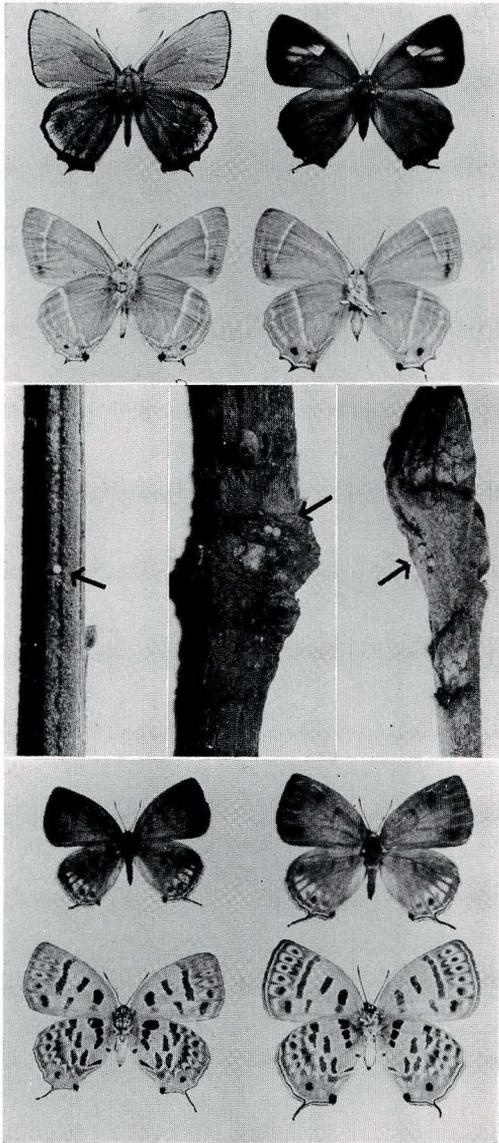


図1 カシワ林に生息するシジミチョウ
 上・ハヤシンドリシジミ (右♀, 左♂)
 中・同 (越冬卵)
 下・ウスイロオナガシジミ (右♀, 左♂)

ない。同地ではそれが量的にも多い。しかもこれは、後述するように、おそらく古くからの自生であり、また人工林として歴史的にも重要な役割をになって今日まで残ったものである。このカシワ林が一律に「クヌギ・コナラ群集」として、県内の他地域のそれと同等な評価を受けてもよいのだろうか？ その点、地元の産物を誇るつもりは毛頭ないけれども、歴史・民俗・

昆虫分布の見地からはいささかしっくりしないものを感じざるをえない。

カシワと縄文人

農耕という生産手段を持たなかった時代の人間は、もっぱら自然の恵みの中で狩猟・漁撈や植物採集に依存して生きていた。採集経済を基盤とした人々の生活は、当時の気候を反映したその土地土地でのファウナ・フロラに強い規制を受けざるをえなかったのである。ただし、このような時代であっても、有用植物を選択してそれに保護・育成を加えて管理していた可能性は強い。

植物質の食料が遺存体として今日まで残る率はきわめて低いけれども、そのなかで樹木の堅果類は比較的遺存率が高い。縄文遺跡から出土した植物遺存体のうち、その検出率が圧倒的に大きいのは、クルミ類・クリ・トチ・ドングリである。各々の検出率は地方によってことなり、しかもそれは日本列島の現在の植生帯と見事な相関々係を見せている。たとえば、関東地方における検出の比率は、クルミ類51.8%、クリ19.6%、ドングリ16.1%、トチ12.5%となる(渡辺, 1969)。ここで、ドングリとは、ブナ科のアラカシ・イチイガシ・コナラ・クスギ・アベマキ・マテバシイ・ミズナラ・カシワ・ツイ(イタジイ)等の総称をいう。

渡辺(1969)によれば、神奈川県ではクルミ類が川崎・横浜から(計4カ所)、ドングリは横浜で(1カ所)、トチが平塚(1カ所)の遺跡(貝塚を含む)から出土している。ただし、ドングリの種名は確認されていない。

ドングリは本稿の問題と関係が深い。とりわけ、カシワとミズナラについて知りたいところだが、前者は長野県(1カ所)で、また後者は岩手・埼玉・新潟・長野の諸県から各1カ所、種名のたしかなそれが明らかにされているにすぎず、本県における出土例はないらしい。

ドングリは飢饉時の救済食料として近世にも登場する。丹後地方では、腹薬としてドングリの粉が戦後も食べられている。ひとくちにドングリといっても、落葉性と照葉性のものとは、アクの強弱やアク抜き技術に差がある。ドングリのアク抜き技術は今日の山村にも残っており、その起原は遠く縄文時代にさかのぼる。カシワ・ミズナラはアクが強くアク抜きも面倒なため、食料としての利用価値は比較的lowかったのではないかと思う。

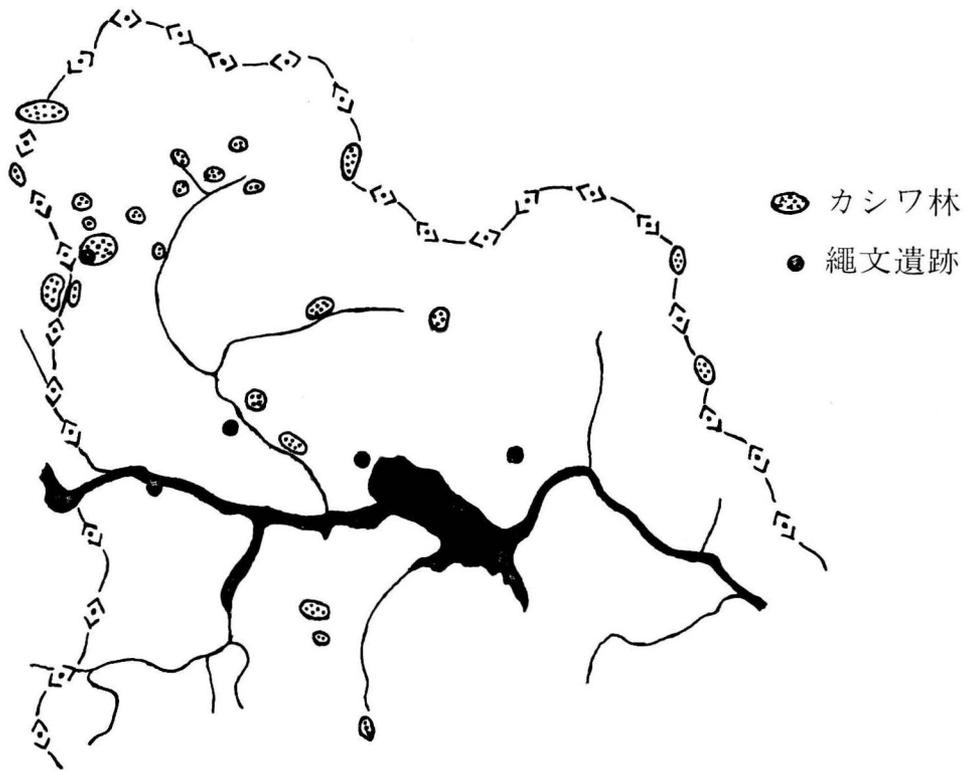


図2 県北におけるカシワ林の分布（最近消滅したものを含む）

ところで、県北地域にいつ頃から人間が住みつくようになったのかはわかっていないが、この地におけるカシワ林の分布圏内には、次のように四つの縄文遺跡が知られている。すなわちそれは、①下岩（正式な調査なし、遺物包蔵地）、②大日野原（同左）、③梶戸（中・後期、遺物包蔵）、④中野（早・前・中・後期、正式調査なし、遺物包蔵）であり、このうち①には現在ハヤミドリシジミ・ウスイロオナガシジミが生息している。②③④および次に記す⑤はいずれも、つい最近の時代までカシワ林があった可能性が高い所である。また、弥生時代の遺跡としては、名倉に⑤中村原（中期、集落址）が知られているだけだ。

これらの遺跡は、相模川およびその支流の河岸段丘上に存在する点が共通しており、昔の人間が水利に恵まれた沢岸の緩斜面や台地上に住んでいたことがわかる。地形の変換域で、やや開けた場所を好んで集落を形成していたともいえる。そしてこのような場所はまた、どちらかといえば、コナラ・クヌギ・カシワなどの二次林を構成する樹種の立地条件ともよく照合している。縄文時代には、この地の植生もかなり人為的

な影響を受けていた可能性が強い。いずれにしても、人とカシワとのかかわりは縄文時代にまでその歴史をたどることができるのである。

ひとくちに縄文時代といってもそれは、8,000年に近い長い時間を擁しており、考古学の分野では早期から晩期までの時代区分もなされている。一つの事件と次の事件との時間々隔は想像以上に長いことになるが、ここではこのような時代感覚を無視して、縄文時代（ときには弥生まで）の出来事をごちゃまぜにして述べた。

いったい、いつの頃から、人間の営力が県北の自然環境に変貌をおよぼすようになったのだろうか？ 最近、火山灰の中に含まれた花粉粒化石の分析が行われるようになってきたので、県北の近隣でこの方面から古環境復元へのアプローチがこころみられる日も遠いことではないかもしれない。ただ、関東ローム層の分析結果は泥炭地でのそれとことなっている点に気がかりであり、またドングリの花粉はコナラ亜属とアカガシ亜属を区別できるのが限界で、種の段階までは同定できない。しかし、原始の森林がそのときどきのい

ど二次林化されていたかを知るために、花粉分析は一つの有力なキーを提供してくれるだろう。

商品としてのカシワの歴史

カシワは用途のひろい木である。後述する用途の他にも、家具材・建築材・器具材・船舶材・土木用材・機械材・薪炭材・まき・下駄材・シイタケ原木・樽材……等に利用され、また種子からはでんぷん（食用）が製造できる。

古来、カシワにちなむ故事来歴は多く、カシワは昔から人々の生活の中にとけこんでいた。けれども、昔はホオノキ・サクラ・アカメガシワ・ササ・イイギリ・サルトリイバラ・ナラガシワなど食物を盛る（あるいは包む）葉を総称してカシワと呼んだむきがあるので、古文書をたよりにカシワと人とのかかわりを正確に読み取することはむずかしい。

徳川時代の租税（年貢）は米穀納が原則だったが、山村の県北地域には耕地が少ないため、種々の雑品税でこれを補わざるをえなかった。農民は米・麦・アワ・ヒエ・ソバ等の耕作よりも、年貢上納のためのウルシやカシワを栽植した。また、養蚕、炭焼、アユ漁、駄賃（駄馬の飼育）、クワの栽植、マツ・スギ・クリその他雑木の管理などをやって生計を立てた。交通の便も悪く、当時の農民の生活状態は悲惨なものだったらしい。

沢井村（現在の藤野町沢井）の村方明細書上帳には柏皮の記録がある。カシワの樹皮を炭・繭・紬等とともに特定の市場で売却する一方、古老の言い伝えによると、カシワはまた年貢納用に重要な産物だったという。

江戸時代には八王子に「柏葉の市」が立った。いうまでもなく、葉はかしわもちを包むためのものである。当初は同市西方の水無河原の芝地において、また後には浅川町河原の宿が開市されたという。そのもようを上原（1977）から引用してみる。

“文化文政の頃は毎年四月廿日頃から五月五日にかけ毎日柏の葉を山と積んだ数百頭の馬が甲州街道を江戸へと送り出されたのである。この市は江戸時代織物売買の「桑都朝市」とともに最も名高く、当時の農民の副業として大きな収穫をあげたものである。植田孟綏の「武藏名勝図会」には次の一文あり。「柏の葉を小仏、並に案内辺より伐出し五月節句前に江戸へ駄馬にて出す。此所（河原宿）へ毎年四月二十日頃より節句前まで毎日山より背負ふて出る。府中、谷保村辺よ

り馬を率て買ひに出るは仲買して江戸へ送るなり。川原の宿、原宿の芝地に市立てり、またこの柏葉は島の場宿（八王子）と横川（元八王子）との間なる芝地に市を立て 其所へ出せる 柏葉は 恩方或は 山入より伐出す。両所にて市をなす」と記す。

又、塩野適齋の「桑都日記」には水無瀬河原の市にあった河西愛貴の市の図を挿入して「柏葉の市の図 柏葉の市は水無瀬川北岸にあり、桑都建置以来、毎歳四月廿五日より五月一日に立つ。馬多し。西の民恩方山に葉をとる。駄馬来ること多し。東の民は柏葉をひさぐため東都に馬をもとめ、来ってこの平に於て売買す。馬は群をなし、大なるは数百頭を率う。あたかも野馬の牧にあるがごとし（中略）昇平の余沢この市にあり」と説明している。”

近代に入ってから状況については、藤野町教育委員会（1976）に次のような記事を見るだけで、県北のカシワに関する資料はほとんど残されていないようだ。

“和田部落では昭和の初期から毎年5、6月になると柏葉採りが行われてきた。柏葉は柏餅を包むのに使われるもので、50枚を1束とし仲買人に売った。昭和4年頃1束の売値は2銭であった。（中略）大正4、5年頃漁網の染料の原料になる、柏木の皮むきが盛んに行われた。この皮むきのことを和田部落ではキノッカアムキといい、毎年5、6月、柏木がよく水をあげた時期に山に入り6尺ほどに伐った原木を木ツチでよくたたいて皮をむいた。皮はよく乾燥させてから7貫目束にして出荷した。当時4束（1駄）50銭の値段であった。”

このように、かつては県北の人々にとってカシワは換金産物として重要な意味を持っていた。八王子という市場を身近にひかえていたことが、いまなおこの地にカシワを健在たらしめたゆえんである。先にも述べたように、カシワ林は藤野町北部の佐野川・吉野を中心とした一隅とその隣接地にのみ集中的に残存している。カシワの立地条件に恵まれていたこともさることながら、おそらく当地では人目につくほどカシワそのものの自生がもともと少なくなかったのだろう。当地におけるカシワ林の成立を考えると、市場の存在といった人為的ファクターだけでなく、このような自然的ファクターも見落してはならないと思う。

ところで、柏葉の集散地として本県の秦野は全国的に有名だ。葉は50枚1束、1万枚単位で各地に送られた。大きさが手頃で品質（硬軟度）もよい信州ものが

最高とされ、その価格は他の二流ものの2倍もした。東京には他に相州もの、房州ものや、茨城・北海道からも柏葉が入荷したが、いずれも並ものだったという(上原, 1977)。

現在の秦野市にはカシワは見当たらない。ここが柏葉の集散地であった当時、はたしてその周辺にカシワ林が存在していたかどうか(秦野はたんなる集散地にしかすぎなかったのか?), 知りたいところだけれども、あいにくと私の手許にそれをたしかめる資料がなく、また遺憾ながら(本稿執筆時には)その時間的余裕がない。どなたかごぞんじの方、ご教示いただければ幸である。県北のカシワが出荷された八王子と一方の集散地秦野との関連にすこぶる興味をそそられるが、当時は秦野と八王子は経済圏を同じくし、消費地東京へは八王子経由で種々の産物が送り込まれていたらしい。明治4年の廃藩置県時には三多摩地方も神奈川に含まれており、やがてこの三多摩が分離されて現在の神奈川県土になったのは明治9年のことである。秦野・津久井・八王子と、カシワを媒体としての縁も、以上のような観点から理解できるのかもしれない。

[註] 柏はコノテガシワ(中国産の針葉樹)のことなので厳格に言えばこの漢字をカシワにあてはめるのは語源的に誤りである。

古老が語る県北のカシワ

武内武蔵(田ヶ岡部落在)・(故)杉本竹雄(鎌沢部落)の両氏から、現地のカシワについて私が数年前に聞いたメモがあるので、以下に紹介しておこう(既述の点については省略)。両氏は、藤野町で生れ育ち、自らもカシワ林を育成した体験を持つ。

(1) 保護・育成

カシワは“無駄のない木”だ。樹皮のタンニンが漁網の染料になる。なめし皮、製皮用にも使える。皮をはいだ中味(樹幹)は炭になる。葉は食物を包むのに利用できる。

当地のカシワは植えたものではない。自生していたものを保護・育成して人工林に仕立て上げた。カシワは雑木の中では最も弱く枯れやすい。1升の実をまいても2~3本しか発芽しない。コナラ・クスギ等が侵入すると、これらの木に負けるのでこれらを取り除く。ヤブがひどくなったり、フジヅルがからむとカシワは枯れやすく、この点でもコナラ・クスギよりも弱い。もっとも、クスギでさえ“大名の気質”であるか

ら、下木になると枯れるので下草刈りはおこたれない。

カシワ林は昭和の初期には現在よりもずっと多かったが、戦争中に一部が伐採されて畑にされた。残った林は、手入れをせずに放置している。

(2) シブ

樹皮をはぐ仕事をシブ取りという。これは5~6月の男仕事だ。カシワの葉・小枝などはゴミになるため、その場で捨て、これを燃料にはもちいない。たき木にはコナラや他の雑木を使った。

シブ取りは大正10年前後まで盛んだった。この頃から他の染料が市場に出廻るようになって次第にシブの用途は衰退。昭和の初めには樹皮の出荷はほとんど途絶えてしまった。

(3) 葉

5月の発芽時に木に登ったり、これをしならせたりして葉を採集する(若葉が硬化しはじめる時分が最適)。女・子供の仕事として明治時代には全盛をきわめた。生の葉を出荷。業者はこれをふかして家屋内へつるし陰干しにする。乾燥した葉はもちやちまきを包むのに使用した。

明智光秀の“三日天下”で、大阪商人がちまきを光秀に献上したところ、彼は皮をむかずに柏葉のままこれを食べたため、商人は光秀の粗暴に驚き、彼を“天下人でない”と軽べつしたという。こういったカシワにちなむ言い伝えが県北の現地にも残っている。

また、例年11月20日にはカシワの葉を拾い集め、「えびすこう祝い」に魚を入れる皿として葉を使った。この風習は昭和の初めまでであった。

(4) 木炭

樹皮をはいだ幹は、白炭・堅炭にして売った(炭質は上の下)。木炭としては、堅く火持ちのよいコナラの白炭が最良とされた。昭和の初め頃からクスギの黒炭が増え、クスギの新炭林が多くなった。たき木(まき)はコナラを使用。炭の質は「クスギ≧コナラ>カシワ>ミズナラ」の順に良好。その他、ソロ・クリ・カン等も炭になる。火の起きと燃焼が速いクリ・ヌルデを精錬用に出荷。ヤマザクラも炭にした。ミズナラは少なく、自生量の割合はコナラの2~3%位で、コナラよりも炭質は悪い。

シブ取りを止めてから後今日まで、カシワ林は薪炭林として、コナラ林・クスギ林とほぼ同率の面積比で部落の周囲をおおっていた。カシワ林床の落葉を堆肥として使ったことはいうまでもない。

(5) 植木

植木・盆栽の用途が多くなったのはごく最近のこと。“貸しは（カシワ）あるけど借りはない”，“後継ぎができるまで貸しは（カシワの葉が）落ちない”……と，“柏松”（カシワのこと）は縁起物にもなるのである。

カシワはどこにあったか？

カシワは陽地を好み、幼樹は日陰には弱い。火山灰地・砂地・湿原がかった所など荒涼とした環境に多いところから、他種と競合しにくい樹種といえるかもしれない。ただ、イメージ的にはやや乾燥ぎみの立地が多い。樹皮が厚く火に強いいため、山火事跡地に純林をつくることがあるという。意外に順応性も強いらしく、谷間や急斜面・尾根あるいは平坦地にも見られる。

県北地域においてカシワ林は沢岸の傾斜地や部落周辺に多く残存しているが、山腹や尾根にもある。大場達之氏によれば、「県北のカシワは八ヶ岳方面から酸性土壌伝いに分布がのびてきたものだろう」とのこと。カシワ本来の性質を考慮すると、この木に人がめをつけ、これを保護・育成する以前の時代には、極盛相の発達しにくい沢筋や急傾斜地、山腹・尾根等に自然状態で生じた崩壊地や倒木地、あるいは山火事などにともなって形成された裸地に分布していたのではないかと推定される。

山火事跡地を別とすれば、樹林を構成するほどの勢力はなかっただろう。せいぜい数本単位で点々と、極盛相の破壊地やその切れ目に生育していた可能性が高い。

とくに、溪谷地帯は樹林の切れ目であると同時に地形の変換域であり、そこはまた相反する環境条件を持った異相の植生がぶつかりあう場でもある。当然そこは、植生のもろい、不安定な場ともいえる。人手を加えなければコナラやクスギにも圧倒されてしまうといったカシワの脆弱さを重視すると、自然に放置されたこの木が生き残れる場所はこのような所しかなかったかもしれない。カシワの生存を許す土壌・生態的環境・微気象などの諸条件を満たした場所が、当時の県北にも局所的に存在したはずである。栃谷温泉付近に現存する崖地のカシワ林を見るとき、以上のようなイメージを感じずにはおられない。

林業が開始される以前の焼畑放棄地も、カシワの侵入する候補地になっただろう。

このへんで、『神奈川県潜在自然植生図』（1975）を見てみよう。県北の立地が現在でも原植生と同じ植生をささえる潜在能力を維持していると考えれば、「原（始）植生≡今日の潜在自然植生」とみることができると。このような見方をした場合、潜在自然植生は現存する植生を参考にして作成されたものであるから、この図は現在と気候条件に大差がない時代の植生を再現したもの、ということもできよう。もちろん、当時の植生がこのとおりだったというわけではない。けれども、すくなくもこの図と近似のものだったということは一つの可能性として考えられてよいと思う。自然環境への人間の働きかけを無視するならば、その時代は縄文晩期から弥生へかけての頃までさかのぼれることになる。

県北にいつ頃から人が住みつき、そして人為の影響が自然環境にも具現されるようになったのはいつ頃なのか、その点まったく不明なので、潜在自然植生図をもって人為作用開始直前の植生を推定することはできない。なぜなら、縄文時代にも寒・暖の気候変動があり、それにとまなう植生の変遷があった。現在とことなる気候条件下では、立地の破壊がなくても、原植生は潜在自然植生と同一なものにはならないからである。

縄文早期にはすでにこの地に人の住みついた形跡が認められるので、縄文晩期の頃にはかなりの人為的影響が周辺の植生におよんでいたと考えるのが自然の見方だろう。人間の居住域（山墾部）を中心として（そこに人が居をかまえていた時には）、人為的な二次林がかなり広範囲に現出していたかもしれない。ただし、都県界尾根やその南側山腹はいまでも人間の居住地や耕地にはなっておらず、このような高標高地が二次林化されたのは、焼畑や林業が導入されてからだろうと考えられる。

縄文時代には、同一場所に人間が長期にわたって継続的に住んでいたとは想像しがたい。この時代においては人の居住は断続的で、人跡の途絶えた空白の時間の方が長かったのではなからうか。縄文人による森林破壊は一時的であって、遺跡が放棄されるとまたもとの状態が復元されただろう。

相模湖周辺における現時点の人間の居住域は沢に沿って集約的に分布しており、沢岸の緩斜面や台地上に集落がある。谷頭の山腹に存在する集落（2～3戸の小部落）として藤野町登里<540～560m>がその例に掲げられるが、このような例はむしろ珍しい。（「平家

の落武者・武田の残党」との伝説もある。) この現象は、古き時代の交通系に起因するところが大きい。先史時代と現代とで集落形成の適地が一致している点が興味深いけれども、この地の地形を考慮すれば(断層線に沿って地下水が湧出)、それも当然のことと納得がゆく。カシワ林もまたこれと歩調を合せるように、各集落をつなぐ道路沿いや部落にびったり添った背後の斜面にその分布が集中しているといえる。

ちなみに、『神奈川県潜在自然植生図』と、県北における現時点のカシワ林の分布をかさね合せてみると、カシワはヤブツバキクラス域からブナクラス域にかけて残存し、主として「アブラチャンーイヌシデ群落」と「シラカシ群落・典型亜群落」とカシワの分布が結びついている傾向が指摘できる。そして、これらの植生単位域は谷筋を中心にのび、谷の源頭を経て山腹へとひろがっている。

図上に示されたこの二つの植生単位域と、先に筆者が推定したかつての時代におけるカシワの本拠地とが、大要において一致する点にははなはだ興味深い。潜在自然植生は、この地における農耕開始直前の植生に類似した状態を物語っているのではなからうか? とりわけ、夏緑広葉樹のまとまりとしてのアブラチャンーイヌシデ群落はチョウにとって無視できない。

図上のアブラチャンーイヌシデ群落はヤブツバキクラス域の上限からブナクラス域の下限にかけてその推移帯として出現し、宮脇ら(1972, 1976)は、この推移帯がいわゆる中間温帯林である可能性を示唆している。中間温帯林といっても、それはヤブツバキ・ブナ両クラス域の構成種をも含んだ混交林に近いものだったかもしれない? そして、ハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミにしても、落葉樹の全体に占める頻度が高い中間温帯林を好適な生息環境とする林縁性のチョウではある。アブラチャンーイヌシデ群落の構成樹種は、『潜在自然植生図』ではアブラチャン・シデ類・ヤマハンノキ・アサダ・カエデ類・ハクウンボク等で代表されているが、この地においては、この群落中にカシワの占める存在もけって無視できないものと私は解釈したい。

ミズナラはカシワの上部に

ミズナラはブナクラス域の下部に出現する二次林樹種といわれる。和田峠〜生藤山の都県界尾根やその南側斜面の一部など、標高 600 m 以上の地にややまとまった数のミズナラが残存している。低地にはミズナラ

はほとんど残っておらず、私の知る自生の下限は田ヶ岡<400m>である。昔は山の高所にかなりの自生があったらしい。ミズナラは雑木林の中に低率で生えているが、コナラ・クスギとともに伐採されて炭になる。戦後、植林の拡大にもなって雑木林が減り、そのぶんだけミズナラの分布も寸断されてしまった。

ミズナラはブナよりも陽性が強く、ブナの極相林が破壊された跡地に出現するケースが多い。萌芽力も強く、育ちがよく木は大きくなる。このようなミズナラの性質から考えて、県北でもその自生地は自然状態ではブナ林の下限域から中間温帯林の上部にあったと思われる。湿気のある所で最も生育が旺盛になる点を加味すれば、谷の源頭部などは自生の適地だったろう。人里からやや離れた山の中でもあるこのような場所は、おそらく林業が開始される以前の時代には、人手はほとんど加わらなかったと推定される。ただし、それ以前に焼畑がミズナラの自生域まで進出していた可能性を否定することはできないけれども……。

ミズナラはカシワに劣らず用途のひろい木ではあるが、県北では薪炭としての価値が大きい。この木と人とのかかわりあいの歴史も、おそらく薪炭としてのものだったろう。

カシワ林に進出したウスイロオナガシジミ

東京近郊の平野部にもかつてはカシワ林が生育していた場所があったらしく、大和市中央林間(多数)や清瀬市(1♀)からハヤシミドリシジミが採集されたことがある。このチョウの分布がほとんど唯一の食樹であるカシワのそれに強い規制を受けるのは当然だ。このチョウは、近隣では倉岳山・笹子峠・大菩薩峠・大岳山(?)等から知られている。もっと範囲を拡大しても、既知産地は富士山西北麓・御坂山地西麓・奥武蔵高原にしかすぎない。これは近隣においてもカシワの存在が稀薄なことによる。

なお、伊東市の海岸沿いの斜面には自生のカシワがかなり見られるという。このチョウの探索が必要だ。

ハヤシミドリシジミがカシワ一辺倒であるのに対して、ウスイロオナガシジミの方は他に自然状態でミズナラ・コナラ・ナラガシワ等を食べる。ウスイロオナガの近隣における分布もまた局所的であり、滝子山・日川・大菩薩嶺・上黒平・三頭山・武甲山・奥武蔵高原にその記録を見るだけで、道志山塊・富士火山・御坂山地からは発見されていない。山梨・長野・群馬諸県ではミズナラ林から採集される例が圧倒的に多く、

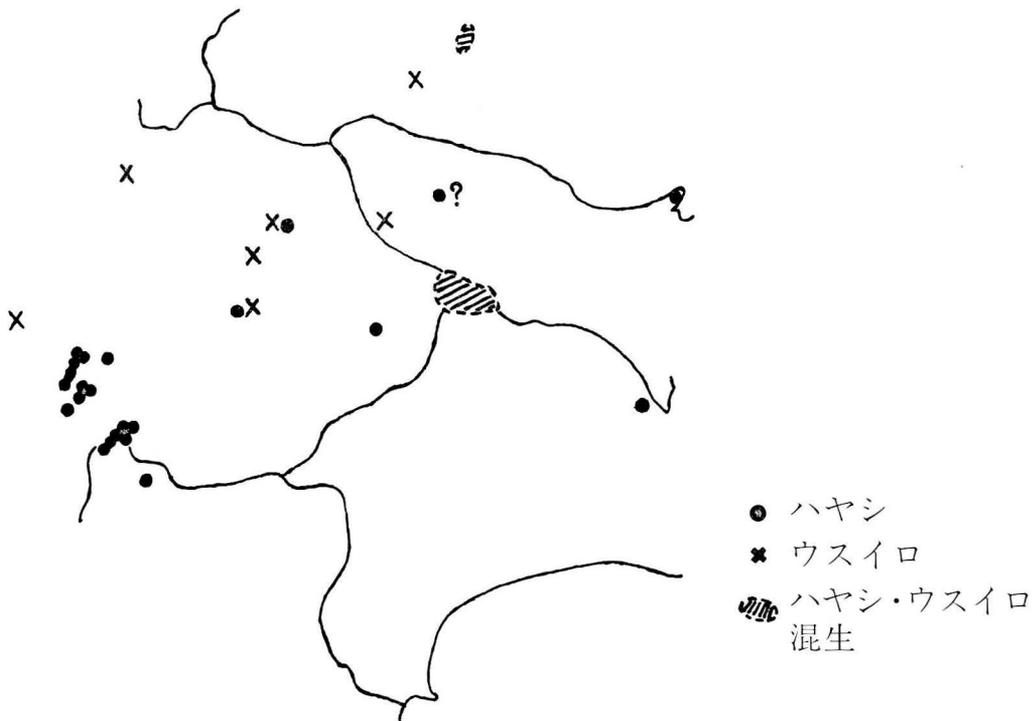


図4 近隣地域におけるハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミの分布

県北地域の近隣でもその傾向が明瞭であることから、ウスイロオナガの主要食樹はミズナラと考えられる。

ミズナラの分布は和田峠～生藤山から尾根伝いに奥多摩・奥秩父の山々へと伸びており、将来分布調査が進展すれば、ウスイロオナガシジミは近隣のミズナラ林域からもっと多くの採集記録が出るはずのものである。私は、大月市滝子山<1590m>の山頂付近のミズナラ林でこのチョウを多数見ている。

ところで、私は県北ではウスイロオナガシジミの越冬卵をカンワから得ただけで、まだミズナラをアタックすることがない。ミズナラからこのチョウが採れた記録は当地にはないけれども、これは明らかに探索不足によるものである。当地においてウスイロオナガがミズナラから得られるのは時間の問題と思う。また、コナラの単独樹からこのチョウが得られたことはないが、場合によってはカンワに接して自生するコナラに産卵する可能性もある。

富士山西北麓や御坂山地西麓（富士川流域）のカンワ林にはハヤシミドリシジミの産地が数多く知られている。北条篤史氏のご教示によれば、標高が低いためかこの地域にはミズナラが見当たらないという。同地に

ウスイロオナガシジミは産しない。ウスイロオナガは富士川をさかのぼった釜無川対岸の南アルプス前衛山地（楯形山・夜叉神峠）に至ってはじめてその姿を見せるが、その食樹はミズナラと考えられる。このことは、ウスイロオナガにとっては、カンワの存在よりもミズナラの方が重要であることを物語っている。つまり、“カンワ林にウスイロオナガを産するためには、その周囲に適量のミズナラが自生していなければならない”ということである。この逆ケースを想定するには難点が多い。

調査不徹底の面で若干の問題は残るが、近隣地域でのハヤシミドリシジミとウスイロオナガシジミの分布実態から次のような推定が成り立つ。

人間の手がまだ県北の尾根～山頂域にまで達しない時代にあっては、ウスイロオナガシジミの生活圏の本拠は山の高所にあつたと思われる。このチョウはミズナラへの依存度が高い。点在するカンワにはハヤシミドリシジミが居付いており、またカンワも量的に少なく勢力も強くなかったため、ウスイロオナガがカンワへ取り付くチャンスは少なかっただろう。やがて山林が伐採され、そこにカンワの人工林が出現するにおよ

んで、ハヤシ・ウスイロ両種が共存してなおあまりある量の食料が確保されるようになった。ウスイロオナガは食卓のメニューを拡大し、二次的にカシワ林へと進出して、その勢力を爆発的に増大させたと考えられる（「ミズナラ→カシワ」の食草転換）。現在では、ミズナラは植林化によって減少してしまった。

なお、奥武蔵高原に産するハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミも、ここで述べた県北の場合と同様なケースと考えられるが（市川・原，1978），その詳細は未調査である。

県内のコナラークスギ林に普遍的に分布しているアカシジミ・ミズイロオナガシジミ・オオミドリシジミ等も県北のカシワ林から見出される。けれども、これらの種の本拠はカシワと接するコナラークスギ林にある。

カシワ林の前途は多難

戦後のエネルギー革命や肥料革命は、薪炭林としての雑木林の運命を一変させてしまった。近郊農村地帯をおそった高度経済成長の余波は、住民の生活・文化をいちじるしく向上させた。農家のサラリーマン化が進行して、耕地は縮少し、荒廃農用地が増えている。

部落周辺のカシワ林が伐採されてアカマツの苗圃になったり、また伐採跡地が小工場に変貌した所もある。カシワの葉を商品として出荷する者も消え（数年前まで下岩部落に1戸が残っていた）、農閑期に炭を焼く人もいまでは1部落に1人くらいしかいない。カシワ林はコナラ・クスギの雑木林とその運命とともにし、用材林としてのスギ・ヒノキ林への置換が進行している。とくに、山腹〜尾根の植林化がめだつ。

スギ・ヒノキの植林化は薪炭林以外の雑木類を対象として手がけられたものだが、最近ではそれが薪炭林にもおよんできた。カシワ林の伐採跡地にスギ・ヒノキを植付けた場合、植林はその生長過程で“枝打ち”され、落されたソダ（伐採枝）はそのまま放置されて林床を被覆する。そのため、カシワの“芽出”は悪く、実苗も枯れて、カシワの再生は完全に阻止されてしまう。

里山の冬の行事“落葉かき”も最近では見られなくなった。昔は、雑木林下の落葉をクマ手でかき集め、カゴに入れて持ち帰り、順次家畜に踏ませてこれを堆きゅう肥に変えたものである。肥料革命は、雑木林の荒廃化を促進し、植林化への道をも早めたといえる。

一方で、最近の盆栽ブームは、カシワの苗を盗難の

危険にさらす結果を生んでいる。上河原部落には、盆栽用のカシワを育てて販売する人も出現した。

ここ2〜3年の動向では、カシワは大木になって伐採に手がかかるようになってきた。スギ・ヒノキの苗代も高騰し、また労力面でも植林の採算が合わないために、放置されるカシワ林も出てきている。

いずれにせよ、用途を失なったカシワ林の前途は暗い。このままでは消滅の運命しか待っていないのである。人間の営為は、カシワの保護をおして間接的に、そこを棲み家とするチョウたちの繁栄を保障してきた。だがそれも今日までで、カシワ林は年々減少の一途をたどってゆく運命にある。

おわりに

武内武蔵・（故）杉本竹雄の両氏から現地のカシワ林について得がたい知見の提供を受けた。伊藤正宏・新井一政・大場達之・高橋秀男・北条篤史の諸氏からは貴重なご教示を得、また情報入手の面で松本和馬・牧林功両氏をわずらわせた。末筆ながら、これらの方々に深謝の意を表するしだいである。

参考文献

- 朝日新聞社編 1968 北方植物園。朝日新聞社、東京。
藤野町教育委員会編 1976 ふじ乃町の民俗文化財（第1集）。藤野町。
藤岡知夫 1975 日本産蝶類大図鑑。講談社、東京。
原 聖樹 1969 神奈川県における蝶相調査の現状と今後の課題(1)。神奈川県虫報、90:3-10。
原 聖樹 1979 ギフチョウの自然史。築地書館、東京。
林 弥栄 1969 有用樹木図説（林木編）。誠文堂新光社、東京。
平井信二 1980 木の事典（第1集2巻）。かなえ書房、東京。
市川和夫・原 聖樹 1978 埼玉県の蝶類。埼玉県動物誌、259-298。埼玉県教育委員会。
神奈川県県民部県史編集室編 1978 神奈川県史（各論編 4 自然）。神奈川県。
神奈川県県民部県史編集室編 1979 神奈川県史（資料編 20 考古資料）。神奈川県。
神奈川県教育委員会 1972 神奈川県現存植生図。神奈川県。
神奈川県教育委員会 1975 神奈川県潜在自然植生図。神奈川県。

- 環境庁編 1980 日本の重要な昆虫類(南関東版). 大蔵省印刷局.
- 京浜昆虫同好会編 1956 蝶類採集案内. 陸水社, 東京.
- 木暮 翠 1975 "林慶コレクション"の目録I(日本産蝶類の展翅標本の部 第5回). 昆虫と自然, 10(10): 30—35.
- 前川文夫 1973 日本人と植物. 岩波書店, 東京.
- 宮脇 昭編著 1972 神奈川県の実存植生. 神奈川県教育委員会
- 宮脇 昭編著 1976 神奈川県の実存自然植生. 神奈川県教育委員会.
- 高桑正敏 1980 神奈川県の実存昆虫相の特性とそれを支えてきた要因. 神奈川自然誌資料, (1): 1—13.
- 高橋真弓 1967 静岡県とその周辺の実存ミドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (67): 1561—1608.
- 田中 蕃 1976 Zephyrus の自然誌(3). 月刊むし, (65): 5—12.
- 徳永重元 1979 東京西部における上部更新統の花粉分析研究. 第四紀研究, 17(4): 235—237.
- 津久井郡勢誌復刻・増補版刊行委員会編 1978 津久井郡勢誌(復刻・増補版). 津久井郡勢誌復刻・増補版編纂委員会.
- 須田孫七・町村忠良編 1961 南関東の蝶類(4) シジミチョウ科. 東京都杉並区立高円寺中学校生物部.
- 上原敬二 1977 樹木大図説(1). 有明書房, 東京.
- 渡辺 誠 1969 縄文時代の植物質食料採集活動について(予察). 古代学, (15): 226—276.
- 渡辺 誠 1977 縄文時代の植物食. 雄山閣, 東京.
- 渡辺 誠 1978 保存食だったドングリヤトチ. 科学朝日, 38(9): 49—53.
- 安田喜憲 1974 日本列島における晩氷期以降の植生変遷と人類の居住. 第四紀研究, 13(3): 106—134.
- 安田喜憲 1980 環境考古学事始. 日本放送出版協会, 東京.

付 記

本文作成後, 大場信義氏のご好意によって「菱山忠三郎(1977)陣馬山の植物, 東京都の自然(5): 1—41」を見ることができた。県北のカシワを理解するうえで貴重な文献と思われるので, この中からカシワに関する部分の要点を抜粋しておきたい(拙稿と重複する点は省略)。

① 陣馬山の柏葉は徳川時代の初期から有名。元禄7～8年, この山のカシワをめぐって, 入会権を持つ上恩方と下恩方などの部落間にいざこざが発生(いわゆる元禄山論)。『中谷山柏葉出入済口下書』には, このとき代官の手代が出張してきて百姓を喚問した記録がある。② 江戸から明治へかけての頃, カシワはいまよりもっと広範囲に, 東京側は山麓の方まで, また北方へは醍醐峠の方面までも分布していたらしい。③ 昭和27～30年, 山頂付近にソメイヨシノ 2,062本が栽植された。これを成木にするために毎年下草刈りがくり返され, カシワは根元から切りはらわれてしまった(陽性の野草類とともにカシワも激減)。

(神奈川県蚕業センター)